

序論)

今日も引き続き、コリント人への手紙を学んでいきます。

私達は今まで、神様の宣教方法を2つ学んできました。一つは、神様はこの世の人たちが愚かと思うような十字架のことばで人々を救い出すということ、もう一つは、神様はあえて愚かな者、弱い者、無に等しい者を用いて人々を救われる。ということでした。

今日の箇所は、それでは実際にパウロの宣教はどうだったのか？ ということを確認していきたいと思います。

神様は愚かなことばと、弱い人を用いて人々を救われるといっても、パウロは律法の専門家だし、ローマの市民権を持っているちゃんとした立場を持っている人です。そんな人が「神様は人々が愚かだと思うことばと、愚かだとされている身分の低い人を用いて宣教される。」なんて言っても説得力がないのではないかと、みなさん思いませんか？ 私は思いました。そして、恐らくコリント教会の人たちも思ったのではないかと思います。

だから、パウロは今日の箇所で自分はどのように宣教をしたのかを語っています。

1) 人のことばや知恵では宣教しなかった。

まず、パウロは、「自分は人のことばや知恵で宣教をしなかった」と語っています。1節を読みましょう。

2:1 兄弟たち。私があなたがたのところに行ったとき、私は、すぐれたことばや知恵を用いて神の奥義を宣べ伝えることはしませんでした。

先ほどいったようにパウロは律法の専門家だし、生まれつきローマの市民権を持っています。ですから、彼は論理的にキリストの十字架の意味を語ることができたはずですし、ローマ社会においても普通のユダヤ人とは違う。ある程度優遇される立場にいました。そして、彼がコリントに来る前は哲学の町アテネにいましたから、ギリシャ哲学的なことを知ることができたでしょうし、その哲学的な理屈で人々に話すこともできたと思います。

でも、パウロはあえて、そのような哲学的なことばや知恵を用いて宣教しようとはしなかったのです。なぜでしょうか？ それはパウロは十字架の福音以外の知恵

をあえて知らないように決心していたからです。2 節を読みましょう。

2:2 なぜなら私は、あなたがたの間で、イエス・キリスト、しかも十字架につけられたキリストのほかには、何も知るまいと決心していたからです。

繰り返しになりますが、パウロはコリントに来る前はアテネにいたし、コリントの町自体も哲学が盛んな町ですから、当時の人々の間ではやった哲学的なことを学ぼうと思えばいくらでもパウロは学ぶことができたのです。

でも、彼はあえてそれらを学んで人々の興味を引くような方法や、納得しやすいことばで話すことをしなかったのです。彼が意識していたのは、あくまでも【主】イエス・キリストが十字架によって死んでくださったという事実であり、それらを意味深に解き明かす知恵ではなかったのです。

細かい話は、この手紙の 3 章を取り扱う時にお話ししますが、当時、ギリシャにおいてグノーシス主義というものが流行っていました。グノーシスというのは「知恵」とか「知識」という意味があって、グノーシス主義の人たちはキリストの教えとか、この世の神秘の中に含まれている特別な知識によって人は救われると考えていました。だから、グノーシス主義の人たちはキリストが十字架にかかって私達のために死んでくださった。という事実よりは、その出来事がどのような特別な意味を持ち、どのような知識を与えるのか。ということをお大切にしていました。

一種の神秘主義的な傾向があるのがグノーシスです。だから、そのようなグノーシス主義が流行っていたギリシャに置いて、人々の関心を買うためには、いかにも特別な知識を持っているかのように語らなければいけませんでした。

でも、パウロはそのようにしなかった。と言っているのです。

現代においても一部の人たちの間では「スピリチュアル」という言葉が流行っています。例えば「あなたが気づいていない本当の自分を知れば道が開ける」とか、「この世の中のあれこれは次元の低いもので、もっと霊的な真理をみなければいけない」とか、「あなたの人生が良くなるためには霊的な目覚めが必要だ」とか、そういう何か特別な真理、特別な覚醒が必要だと「スピリチュアル」を強調する人たちは、霊的真理を示されたとか、もっと言うと神様から預言が与えられたといいながら、その以下にも特別な真理や知識を YouTube とかで発信したりしています。

みなさんの中にも、もしかしたら、そういう「特別な真理があるんですよ。」なんて言われると、そこに関心を持ってしまう人がいるのではないのでしょうか。

この手紙が書かれた当時に流行っていたグノーシス主義の人たちもそういう感じだったのです。でも、パウロはそういった神秘主義的な言い方、別の言い方をするとカルト的な宣教の仕方はしなかったのです。

彼はそのような曖昧な言い方をせず、「キリストが私達のために十字架にかかって死んでくださった。」という誤解のしようがない事実、この点だけを大切にそれをそのまま語っていったのです。

なぜならば、彼はこの世と調子をあわせるようなそういう宣教をせず、十字架につけられたキリストだけを語ろうと「決心」していたからです。

私も、どうしたら皆さんにうまく伝わるのか、どうしたらみなさんに感動してもらえるのか。もっと良い表現、もっと良い言い方はないか。そもそも、どうやったらみなさんにもっと関心を持ってもらえるのか。そういうことを考える時があります。でも、私達が語るべきなのは、そういったこの世の風潮とか、この世の関心に合わせた事ではなくって、キリストの十字架。それだけなのです。

そして、そのキリストを語るためには、この世のことばではなく、キリストの十字架だけを語るという強い決心が必要なのではないでしょうか。

みなさんは、この世に合わせるのではなく、【主】によって教えられた十字架だけを語るという決心をされていますでしょうか？

2) 当時のパウロの状態

パウロは、コリントに行った時、非常に弱い状態だったようです。3節を読みましょう。

2:3 あなたがたのところに行ったときの私は、弱く、恐れおののいていました。

律法の専門家であり、大伝道者であるパウロが弱い状態というのは皆さんは想像できるでしょうか。彼がどのように弱っていたのか、聖書は細かく説明していませんけども、使徒の働きに書かれているパウロのギリシャ伝道の状態から想像するとなんとなく見えてくるものがあります。

パウロはなぜ、コリントまで来ることになったかということ、元々は聖霊によってマケドニア人が「私達を助けてください」といっている幻を、【主】にみさせられたからでした。パウロは、元々エペソのほうに行きたかったのに【主】に導かれてマケドニア、つまりピリピに行ったのです。

ところが、ピリピにいて彼が経験したことはなんでしょう？ ローマの市民権を持っているにも関わらずムチで打たれ、投獄されるという経験です。

【主】はそこからパウロたちを救い出してくださいましたが、次にパウロがいったテサロニケでは、ユダヤ人たちが暴動を起こして、パウロたちは夜逃げのようにしてその場を離れなければいけませんでした。そして、パウロは次にベレヤに行きますが、そこにもユダヤ人が追いかけてきて騒動をお越し、テサロニケと同じように彼は逃げるようにしてアテネにいったのです。

そして、ギリシャ哲学の中心地であるアテネでパウロは伝道しようとはしますが、そこでパウロはアテネの人たちの冷たい反応に直面します。

使徒の働き 17 章を読んでみましょう。17 章の 31 節、32 節。

17:31 なぜなら、神は日を定めて、お立てになった一人の方により、義をもってこの世界をさばこうとしておられるからです。神はこの方を死者の中からよみがえらせて、その確証をすべての人にお与えになったのです。」

17:32 死者の復活のことを聞くと、ある人たちはあざ笑ったが、ほかの人たちは「そのことについては、もう一度聞くことにしよう」と言った。

使徒の働きに書かれている、パウロのアテネにおける宣教は、どちらかというのアテネの人たちに合わせた言い方をしていました。でも、多くの方は、復活の話をすると馬鹿にしてはなれていったのです。

もちろん、パウロのアテネ宣教で、パウロの言うことを信じる人たちもいました。でも、自分たちが今まで一生懸命語ってきたキリストの十字架と復活を多くの人たちが受け入れなかったという事実は、パウロに少なからずのショックを与えたのではないのでしょうか。

だから、このアテネの出来事を経験した後に、訪れたコリント宣教では、どうしたら人々がキリストを信じることができるだろうか。とか、自分はこの人たちを救いに導けるだろうか。といった思い悩みや自信の喪失がパウロの中にあったのだと思います。

でも、パウロはそのように弱く、恐れを抱いていたのに、それでもこの世に合わせるのではなく、十字架のキリストだけを語ることを決心して、人々が愚かと思う十字架の福音を語り続けたのです。

3) 恐れながらもキリストだけを語り続けた理由

では、なぜそのように恐れながらも、パウロは十字架のキリストだけを語り続け

たのでしょうか。それはパウロが強い決心を持っていたからではなく、实际的に聖霊と【主】の力を受けて語っていたからです。4節を読みましょう。

2:4 そして、私のことばと私の宣教は、説得力のある知恵のことばによるものではなく、御霊と御力の現れによるものでした。

パウロは、キリストの十字架を語るにあたって、この世の説得力のある知恵を用いることなく、聖霊の助けと、神様の力によって語っていました。

実際に、使徒の働きを見ると、その事が書かれています。ちょっと長いですが、パウロのコリント伝道の箇所をみてみましょう。

18:1 その後、パウロはアテネを去ってコリントに行った。

18:5 シラスとテモテがマケドニアから下って来ると、パウロはみことばを語ることに専念し、イエスがキリストであることをユダヤ人たちに証しした。

18:6 しかし、彼らが反抗して口汚くののしったので、パウロは衣のちりを振り払って言った。「あなたがたの血は、あなたがたの頭上に降りかかれ。私には責任がない。今から私は異邦人のところに行く。」

18:7 そして、そこを去って、ティティオ・ユストという名の、神を敬う人の家に行った。その家は会堂の隣にあった。

18:8 会堂司クリスポは、家族全員とともに主を信じた。また、多くのコリント人も聞いて信じ、バプテスマを受けた。

18:9 ある夜、主は幻によってパウロに言われた。「恐れなくて、語り続けなさい。黙ってはいけない。」

18:10 わたしがあなたとともにいるので、あなたを襲って危害を加える者はいない。この町には、わたしの民がたくさんいるのだから。」

18:11 そこで、パウロは一年六か月の間腰を据えて、彼らの間で神のことばを教え続けた。

パウロはコリントでもユダヤ人たちの強い反発を経験しました。しかし、それでもパウロは福音を語る場所を、ユダヤ人会堂からギリシャ人の家に移しながらも福音を語り続けたのです。でも、パウロ自身が先程の箇所で「弱く、恐れおののいていました」と言っているように、自分の伝道の仕方について自信を無くしていた時もあったのでしょうか。【主】ご自身がパウロに幻をみせて「恐れなくて、語り続けなさい。黙ってはいけない。」と言われたのです。そして、この【主】の励ましを

受けて、パウロは一年六か月の間腰を据えてコリントで伝道を続けることとなります。これはパウロの伝道旅行の中でエペソに続いて二番目の滞在期間の長さとなります。

みなさん、エペソはある意味でもともとパウロが行きたいと思っていた地です。ですから、そこでパウロが腰を据えて伝道するのはある意味で当たり前です。でも、コリントはパウロの意図していない流れの中で、来ることになった町であり、パウロに自信を失わせた町です。それにもかかわらず、パウロにしては2番目に長い期間滞在して伝道が続けたのです。なぜですか？ 【主】がパウロに力を与えたからです。

宣教は、みなさんの力、私達の人間的な力によって行うものではありません。むしろ、私達の力ではなく、聖霊と【主】の力によって行うものなのです。なぜならば、【主】は私達、人間の力ではなく、主ご自身の力によって私達に宣教をさせることによって、その【主】の力によって伝道された人たちも、同じように人の知恵ではなく、神様の力によって信仰を持つようにさせるためです。5節を読みましょう。

2:5 それは、あなたがたの信仰が、人間の知恵によらず、神の力によるものとなるためだったのです。

結局【主】は、伝道する人にも、そして、その伝道を通して救われる人にも、主ご自身の力を体験させたいのです。そして、人々を救うのはアポロでも、パウロでもなく、主ご自身であるということを知ってもらいたいのだと思います。

結論)

愛するみなさん、今日私たちはパウロの宣教の姿勢から、信仰と宣教における根本的な真理を学びました。

パウロは律法の専門家であり、ローマ市民権を持つ知識人でした。彼は哲学的な議論や説得力のある言葉で人々を納得させることもできたでしょう。しかし、彼はあえてそのような人間的な知恵や力に頼ることをしませんでした。なぜでしょうか。

それは、真の救いは人間の知恵や能力によってではなく、ただ神の力によってのみ与えられるものだからです。

パウロは弱く、恐れおののいている状態でコリントに来ました。アテネでの冷たい反応、各地での迫害によって、彼の心は傷つき、自信を失っていたかもしれません。

しかし、そのような弱い状態の中でこそ、主は「恐れなくて、語り続けなさい。黙ってはいけない」と励まし、聖霊の力を与えてくださったのです。

現代の私たちも同じです。私たちは時として、どうすれば人々にうまく伝わるか、どうすれば感動してもらえるか、この世の関心に合わせた方法を考えてしまうことがあります。しかし、私たちが語るべきは十字架につけられたキリスト、ただそれだけなのです。

神様は意識的に、人間の知恵によらず、神の力によって信仰を与えようとされます。だからみなさん、伝道しようとするとき、弱くても、恐れていてもいいのです。そういうときこそ、【主】から励ましを受けて、【主】の力によってキリストを伝えていきましょう。【主】は、みなさんの力ではなく、【主】ご自身の力によって、みなさんの周りにいる人たちを救い出してくださいます。

私達は、その【主】の力を信じて、キリストの十字架を語り続けていきたいと思っています。最後に【主】がパウロを励ました言葉を読みます。

使徒の働き 18:9

ある夜、主は幻によってパウロに言われた。「恐れなくて、語り続けなさい。黙ってはいけない。

★応答の時

あなたが信じている福音は、「人を感心させる知恵」でしょうか？

それとも、「人を救う神様の力」でしょうか？

パウロは、自分の語る力でも、人を引きつける話術でもなく、ただ「十字架につけられたキリスト」を語る決心をしました。弱さの中でも恐れながら、聖霊と神様の力により頼んで語り続けました。

あなたが何かを語るとき、あるいは証しをするとき、そこには神様の力への信頼があるでしょうか？

それとも、自分の知識や言葉の巧みさに頼ろうとしていないでしょうか？

弱さを感じる今こそ、【主】の声に耳を傾けてみてください。

「恐れなくて、語り続けなさい。黙ってはいけない。」と言っておられます。

あなたは、どのようにこの御言葉に応答しますか？

今、しばらく黙想して自分の応答を書き出してみましょう。